

学び続ける学校

別海町立別海中央中学校 校長室便り

発行 校長 青坂信司

第3号 平成27年6月12日(金)

※生徒たちの体育祭での苦しみや頑張り、そして達成感。若かりし頃の自分を思い出し、なんともいえない感情になる。

若いうちにこそ、自分の教育観・子ども観を磨こう

◆校長職に就いて職員に何度か紹介してきた話がある。それは故東井義雄氏の体験した実話である。氏は、間違いなく日本の教育界に燦然と輝く、偉大な教育者のお一人である。この実話は、私に教師として「子供のために何ができるのか」を問いかけてくる。

◆広島県のとある高等学校でクラス対抗リレーがあった。あるクラスで3人まで決まったが、あと1人が決まらなかった。その時に、あいつがいいやとみんなが言い出して決めたのが、Aさんという身体不自由の生徒。なぜかといえば、変な格好で泳ぐのを見てみんなで笑ってやろうという、そういうことだった。非常にその学校は荒れていた。さて、そのクラス対抗リレーの当日、三人が泳いで、最後にAさんが飛び込んで泳いだ。皆が笑った。「変な」格好で泳いでいるようにみえるAさんを見て、皆が笑った。その時に、背広を着たまんま、プールに飛び込んで、そのAさんの横について、「しっかりしろ、もう少しだ、がんばれ」というふうに励まし続けた人がいた。それがその校長先生だった。その生徒がゴールにたどり着いた時には、今まであざけていた人が肅然として、誰一人声を出すものがいなかったというのである。

◆東井義雄先生の詩に次のがある。

「川は岸のために 流れているのではない」

川は

岸のために流れているのではない

川のために 岸ができているのである

わかり切ったことである

それなのに

教師の考え

学校の方針にあわない子どもを

「悪い子」「問題の子」「困った子」として

切り捨ててしまう風潮が横行しているのはどういうことか

子どものために「教師」があるのである

子どものために「学校」があるのである

「できない子」のための岸になろう

「困った子」のための岸になろう

そして

ともどもに

「心理」「真実」の海を目指そう

そういう教師になろう

そういう学校を創ろう

川は岸のために流れているのではないのだから

昔、故東井義雄先生が作られた詩だが、教育の本質は何も変わってはいない。何故に教職に就いているのか。誰のための教師なのか。今一度、自分の足元を見つめ直すことの大切さを思う。

若いうちにどうしても身に付けたいこと、それは子どものために教師がいる、教師としての自分の存在があるということだ。

ともすれば時間という流れの中で、現状に慣れ、現状のみを良しとしてしまう自分がいる。そのためにも、時折、昔読んだ本をめくっては、自分の教師としての原点を確認する必要を痛感している。